認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
2020年4月発行

KENYA STUDY TOUR

2019/08/07-2019/08/16

参加者レポート2019

ケニアスタディツアー

フリー・ザ・チルドレン（現名：WE）は、ケニア南部の地域で1999年より活動をしています。農村自立支援事業を通じ、教育・水と衛生・保健・収入確保・農業と食糧の支援を20を超えるコミュニティと共におこなってきました。

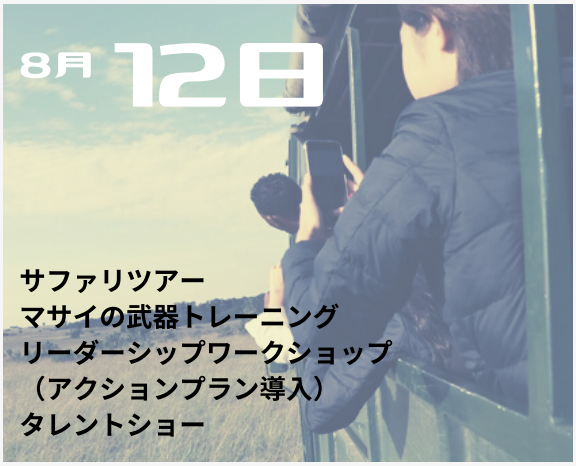
本スタディツアーは、農村自立支援事業を軸に、コミュニティの変化や今を知り、現地で必要とされているボランティア作業を実施、また現地の人々との交流や自分自身にできる事を見つけるリーダーシップトレーニング、文化体験を含むプログラムとなっています。本年のツアーには、東京・埼玉・神奈川・愛知・大阪から中学生～社会人の11名が参加しました。

フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンは、1995 年に当時12 歳のカナダのクレイグ少年によって貧困や搾取から子どもを解放することを目的に設立された「Free The Children」を母体に1999 年から日本で活動を始めたNPO です。開発途上国での国際協力活動と並行して、日本の子どもや若者が国内外の問題に取組み、変化を起こす活動家になるようエンパワーしています。

8月 7・8日

成田空港集合
仁川・アディスアベバを経由しナイロビへ
チャーター機でコミュニティへ
キャンプ地でオリエンテーション



8月 12日

サファリツアー
マサイの武器トレーニング
リーダーシップワークショップ
（アクションプラン導入）
タレントショー

8月 9日

スワヒリ語レッスン
先生寮の建設ボランティア
リーダーシップワークショップ
（自分や仲間のチャレンジを知る）
ケニアの教育についてのレクチャー

8月 13日

マサイママのビーズトレーニング
ショッピング
ヨガレッスン
お宅訪問・水運び体験

8月 10日

ローカルマーケットでの買い物ワーク
先生寮の建設ボランティア
マサイの文化についてのレクチャー

8月 14日

マサイの薬草ツアー
グレートバリアリーフ観光
リーダーシップワークショップ
（アクション共有）

8月 11日

Oleleshwa農園訪問
Baraka病院訪問
Kisaruni女子校訪問

8月 15・16日

ゲストスピーチ
（アクセプトインターナショナル）
アディスアベバ・仁川を経由し成田空港へ

ツアースケジュール

プログラムPickUp

レクチャー & トレーニング

見るだけで終わらないのが
スタディツアー！

スワヒリ語レッスン

新しい言語を学ぶことが好きなので、初めにスワヒリ語を少し覚えたことで、街でも使えたり、友達もできて、とても嬉しかったです。

楽しみながら学べ、勉強意欲の湧くレッスンでした。

Tafadhali
please

Twende
Let's go

Jambo!
Hello!

ケニア教育レクチャー

学校訪問で、WEの教育支援について詳しく知れた。事業が拡大して、今はいい環境で授業が受けられているのに驚きました。しかし、まだ支援が行き届いていない学校も多く存在する。少しでもいい環境で授業に集中できる生徒が増えるよう、私たちに何ができるのか考えるきっかけにもなった。

（上）昔使っていた教室
（下）現在の教室

マサイ文化レクチャー

マサイ戦士のファシリテーターであるフィリップが、自分の経験談からマサイの衣食住や、成人の儀式、ライオンとの闘い、結婚などの文化について話してくれました。

自然の中で生きる
彼らの人生観を知る
ことができたことは
興味深かった！

プログラムPickUp

マサイママのビーズトレーニング

日本でも販売中の、マサイのママ達が手作りするフェアトレード商品"Rafiki Chain"。
オリジナルアクセサリーを作りました！

ビーズアクセサリー作りの市場や事業がどう成長し変化しているのかも知れてよかった。

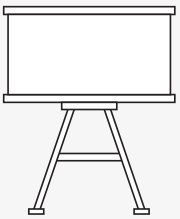
ビーズアクセサリーがとても可愛くて、マサイママたちがそれで生活できるようになっているのはすごいな、と感じました。慈悲で買おう、じゃなく、欲しいから買おう、と思える商品を作れていることが良いと思いました。

マサイの武器トレーニング

弓矢とコンガの使い方を1人1人マサイの戦士フィリップより教わりました。
その後は、チーム対応的当てゲームで熱戦！

話を聞くだけでなく、実際に弓を射る体験ができた。弓を射たのは今回が初めて！楽しみながら文化を学べてよかった!

優秀賞おめでとう！



ゲストスピーチ

アクセプトインターナショナル
ケニア事業部 山崎琢磨さん

若者には若者が支援したほうが受け入れてもらいやすい、というお話しが興味深かったです

こんなに勇気ある活動をされている日本人の方がいるのだと知り、私も勇気をもらいました。

ギャングの問題について、この講演で初めて知りました。山崎さんが言っていたように同じ世代だからこそわかり合えたり、解決できることって多いと思います。ずっと発展途上国に関する仕事がしたいと思っていましたが、抽象的で何がしたいのか分からずもやもやしていました。ですが今回の講演を聞いて、学生の強みを活かした活動、若い世代を助けたい、支援したいと強く思いました。

プログラムPickUp
リーダーシップワークショップ

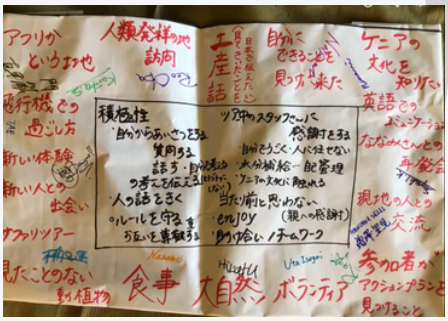
チャレンジゾーン

お題に対し、自分自身が、
「安心して取り組めるもの」
「挑戦と感じるもの」
「パニックになるもの」
から選び、自分のその理由を共有するワーク。
感じ方は人それぞれ！共に過ごす仲間を知る機会になりました。

普段はあまり意識しない「自分自身の考え」と向かい合う機会になり、それぞれの考えを聞けてよかった。

セーフスペース

全員が始めてくる場所で、はじめましての仲間と過ごす日々を、意味のあるものに、また皆が気持ちよく過ごせるよう、ルール作りを行いました。



社会分解 &
アクションプランニング

自分が解決したいと思う社会問題と、それに対する想い、自分にできるアクションを共有するワーク。
1人1人の想いに真剣に耳を傾けました！

アクションアイディアを出した後、それを現実にするためのS.M.A.R.T.目標の考え方も学びました。

全員の社会問題についての話が聞けて、知らなかった社会問題もあり勉強になりました。

ひとりひとりのことを尊敬できたいい機会でした。

具体的・現実的に計画を立て、実行することの重要性を学べた。

他の参加者の新たな一面を知ることが出来たとても良い機会でした。これを通して参加者同士の絆や信頼が深まったと思いました。

タレントショー

好きなこと・得意なことを使って、キャンプファイヤーでのお楽しみ会！歌って・踊って・コントに寸劇にマッサージ…etc
盛り上がりました！

プログラムPickUp

建設ボランティア

Olorien小学校の脇に、
先生の為の寮を建設！
建物の基礎を作るために、
大きな石や砂利を運び、その後、
石を並べてセメントで繋ぎ固める作業
を2日間に分けて行いました。

先生寮の建設は基礎の建設までで、
完成には至らなかったですが、
自分でも誰かのために働ける、
働いていると思える
とても良い機会でした！

なぜ先生寮が必要なのか
解説があったので、理解
しながら作業できまし
た！

もっとやりたかった！

でも、体動かして活動
できて良かった。

ローカルマーケット

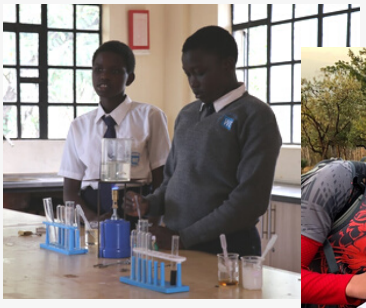
２つのチームに分かれ、家族として
買い物をするワークショップ。
1チーム10ドルで、値下げ交渉も
しながら自分たちで買い物
を達成しました！

どのような生活をして
いるのか自分の目で見る事
が出来ました。初めての値段交渉
も、現地スタッフのフォローもあ
り、楽しみながら現地の方々と
交流ができた！

観光客向けではなく、
実際日ごろ現地の人が使っている
ところに行けて良かった。ただ買い物
するだけではなく、貧富の差や生活すること
との大変さを学べた。数字で言われるより
も実際体験してみると厳しさがよくわか
りました。同時にマーケットの人たち
の優しさにも触れられたのが
良かったです。

プログラムPickUp

キサルニ女子高等学校



女子高訪問は、今回のツアーで最も印象に残っている。一方的に知識を教えたり学んだりする「教員と生徒」の関係ではなく、生徒が自分で調べて学習し分からないところを質問するという「ファシリテーターとラーナー」という関係であった。これは、今、日本が進めようとしている「主体的・対話的で深い学び」を先取りして取り組んでいると感じた。１日のスケジュールを聞いていると、朝４時半に起きて夜遅くまで学習活動をし、自習時間も多く取られていることも印象に残っている。

Oleleshwa農園、Baraka病院、Kisaruni女子高校を訪問した事により、支援地域がいかに発展してきたのか、どれだけ現地の人たちの生活水準が良くなったのかを知りました。WEはこんなにも多大な影響を与えたんだと感じた瞬間でした。是非、他の人にも訪問して欲しいと思いました。施設を隅々まで説明し、質問に対しても納得のいく返答があってとても有意義な時間を過ごせました。

バラカ病院

病院の設備が私の思っていたより何十倍も発展していて驚きました。レントゲンや手術室など日本と変わらないなと感じました。
また、注射の時にはきちんと皮膚を消毒していたり針は使い捨てでの使用を徹底していたりするなど、衛生管理も日本と変わらないことが分かった。患者の費用負担については予防接種を含めて保険でカバーされるとの話は、日本にはない制度だと感じた。エイズと結核については対応する部屋を別に用意していて、意識の高さが印象に残っている。

2018年12月に開催された「東京グレートサンタラン」で参加者が書いたメッセージ付きの絆創膏のプレゼントもデコレーションして渡しました！

オレレシャワ農園

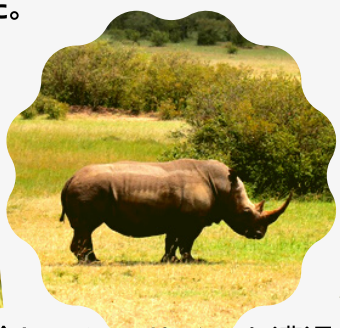
農園の技術をコミュニティに教えているという説明がありました。交代で各コミュニティからここに学びに来ているとのこと。実際にコミュニティに行ったときに実践されていたのが確認でき良かったです！！

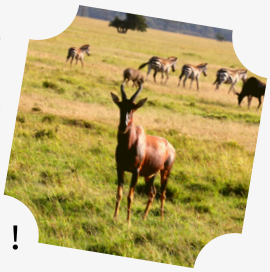
プログラムPickUp

サファリツアー

この日は衝撃を受けるばかりの日でした。
初めて陸で地平線を見たり、野生では見たこともない動物を見たり、ここは地球なのかと思うくらい夢の中にいるようでした。壮大な景色とゆうゆうと歩く動物を見れて感動しました。

早朝に出発！途中で見た朝日がきれいだった！





珍しいシロサイにも遭遇！

サファリツアーでは動物の鳴き声や川の流れる音を楽しむことができました。
また、車で走っている時は、舗装されていない道の大きな揺れを楽しみました。

ライオン・キングを連想させる広大なサバンナで野生動物を見るサファリツアーは、今まで動物園でしか見たことのなかった動物たちの本来の姿を見る機会でした。
とても神秘的だと感じました。

マサイの戦士フィリップがガイドとして動物の説明もしてくれました。Asante!

車から降りられるとは思っていなかったので感激した。
サファリの印象がだいぶ変わったので、自分の目で見てよかったと感じています！

プログラムPickUp

お宅訪問・水運び体験

キプシギスの家を訪問し、昔ながらの家と今の家を比較して見せてくれました。また、WEの活動により、いかに生活向上を図れたのかも知りました。

左上：昔ながらのお家（外）
左下：昔ながらのお家（内）
　　火を起こすキッチンが室内にある

右上：今住んでいるお家（内）
　　写っているのはリビング
　　左に寝室スペースがある
右下：今住んでいるお家(外)
　　屋根にはソーラーパネル

トイレ（外）

トイレ（内）

ごみ箱/焼却場

シャワーと洗濯紐

食器棚/乾燥スペース

外で用を足す習慣があったため、「はじめWEからトイレを使うように言われたとき、床にあいた穴に向かってするのは怖くもあった。しかし、今では中じゃないと落ち着かない！」と笑いながら話している姿が印象的でした。トイレには手を洗うための石鹸とお水もありました。また、洗濯物は洗った後、これまでは地面に敷いて乾かしていたが、紐にかけて乾かすようになったこと、洗った食器の水気を飛ばして日光で乾かすようになったことなど、衛生指導による変化がたくさん見れました。

水運びの"体験"は楽しかったが、日頃これを日課とする現地の女性たちはとても苦労していることを知りました。やはり、このような場面で水道のありがたみを改めて認識する機会でした。

生活の様々な場面で使う水は、この川から。川の上流には農園もあり、水に農薬が混ざったり、動物も水浴びをしている。水を汲みに行ったとき、水浴びをしている人もいた。

H.K.さん （当時中学1年生/愛知県）

ツアーに参加した理由

僕がケニアのスタディツアーに参加した理由は一度アフリカに行って、その文化を肌で感じたかったからです。
また、アフリカの現状を自分の目で見てみたかったからです。

印象に残っていること

僕の中で一番印象に残っているのは、サファリでの体験です。サファリでは、日本ではまず見られない動物がいっぱいいて、新鮮でした。また、マサイマラに2頭しかいないというサイに会えたことも印象に残っています。

自分自身の変化

スタディツアーに参加する前は、自分の意見を発表することに抵抗があったけれど、今は自分の意見を発表することに抵抗を感じなくなりました。

アクションプラン

週刊誌などによるプライバシーの侵害をなくしたいと思っています。例えば不倫や闇営業など、別に知らなくてもいいことや不幸になる人が増えることなど、誰も幸せにならない情報を無くし、生活に関係するような記事にしていきたいです。そのために、啓発活動をして、多くの人の認識を変えていきたいと思っています。

これから

アフリカには、大変な生活をしている人達がいるということを考え、これからの行動に活かしたいです。

K.S.さん

（当時中学1年生/東京都）

ツアーに参加した理由

私はFTCJのスタディツアーに、ずっと前から参加したいと思っていて、やっと中学生になって参加できることをとても楽しみにしていました。しかし、そもそも海外に行くこと自体がまだ3回目だし、親なしで海外に行くことも初めてだったので少し心配もありました。ですが、アフリカという行ったこともない未知の世界に行き、それを自分の目で見て、足で歩き、手や耳や鼻やもちろん心でも、体じゅうでケニアを感じたかったということがこのスタディツアーに参加したいちばん大きな理由です。また、ケニアの文化を知り、その上で社会問題を学び、どうすれば解決の方向へ進んでいけるのかを知識を得ながら考えたかったということも大きな理由のひとつです。

印象に残っていること

私は、キサルニ女子高校へ行ったことが一番印象に残りました。私はそこで学校の案内をしてくれていたDorcasという子と親友になりました。部屋から別の部屋に移動するとき、私に声をかけてくれて、私も英語があまり話せないなりに頑張って話したら、いつの間にかとても仲良しになっていたのです。Dorcasは携帯電話や電話を持っていないと言っていたし、彼女の暮らす地域には住所という概念もありません。だから、私たちは別れる時に2人の宝物として紙飛行機を折り紙で折りました。私の紙飛行機にはDorcasがたくさんハートを描いてくれました。

どんなに連絡手段がなかったとしても、私たちはこの紙飛行機でいつでもお互いの国に行ける、そう2人で約束して別れたあの瞬間は一生忘れないと思います。

自分自身の変化

今までは日本のテイク・アクション・キャンプにしか参加したことがなく、それとケニアのスタディツアーは別世界のものでした。ケニアと日本はライフスタイルから文化から人の性格や景色まで何もかもが違う世界で、それを体じゅうで感じることができて、とても嬉しかったです。また、普段のキャンプでは交流できないような人ともたくさん出会い、新しいつながりが増え、新しいことを知れました。やはり、ずっと日本で社会問題を考えたり話し合うのもいいけれど、実際に現地へ行ってその場で考えたりする方が、より良い意見も出てくるから良いと思いました。

ケニアに行ったことで、私は自分の中で革命を起こそうと決めました。これからいろいろな場所に行き、いろいろなことを知り、考え、自分の先入観を壊して常に真実を伝えられるようにしたいと思うようになりました。

アクションプラン

気候変動に興味があるのですが、気候変動はボランティアなどで解決できる問題ではないので、ひとりひとりの意識改革が必要だと思います。そのために、私が影響を受けた、気候変動活動家のグレタさんのスピーチをまわりの人に広めていくこと、そして自分の気候変動に対する意見や想いをガンガン発信していきます。

簡単なことで、アクションと言えるのか分かりませんが、これでどこまで人を感動させられるか、そしてどこまで自分を変えられるか、そのチャレンジをしたいと思います。

これから

ケニアで学んだことをまわりの人に伝えていくこと、まずはそこから始めようと思います。あとは、お風呂でシャワーの水をあまり使わなくても（流しっぱなしにしなくても）全然困らないということも学び、習慣として身についたので、家でも実行しています。

S.K.さん

（当時中学2年生/神奈川県）

ツアーに参加した理由

アフリカに行けるのはとても貴重な体験だし、クリスマスキャンプに参加したこともあったのでフリー・ザ・チルドレン・ジャパンに対して信頼もあった。社会問題について考えるなど、単なる旅行と違ってとても勉強になると思ったから。

印象に残っていること

サファリツアーで大自然に触れられたこと。どこまでも続く草原と360度見渡せる空の中で、檻に入っていない貴重な野生の動物を見て、景色や空気も一緒に感動しました。現地の方に、動物ごとの特性や注意点なども説明をしてもらえて、野生の状態の動物たちについて理解することができました。

自分自身の変化

いままでは、アフリカの人たちといえば、飢えに苦しんでいるというイメージがあって、何だか可哀そうだなと思っていました。だけど実際に現地の方と触れ合ってみたら、お金がなくても今の生活を受け入れて、明るく前向きに幸せに暮らしていて、可哀そうと思う必要はないんだと思いました。知らない人にも積極的に話しかけてくれたり、むしろ日本人よりもケニアの人たちの方が心は豊かに暮らしていると感じました。

アクションプラン

海洋プラスチックの問題解決のために、自分のプラスチックの消費量を減らし、更に色々な人に呼び掛けるために、ポスターを作って貼ってもらう。

これから

アフリカには水や食料の不足などあるので、支援は必要だけれど、一方的に与えたり、やってあげるのではなく、現地の人たちが自分自身の力で考えて自力で解決する手助けをするということが大切なんだと思いました。

日常生活でも、友達や周りの人と接する時には、相手の成長を促すような関わり方を心掛けたいと思います。

N.M.さん （当時中学3年生/神奈川県）

ツアーに参加した理由

世間の人々は、開発途上国の人の事を憐れみの気持ちを持って見ているが、それは実際はどうなのか、自分の目で確かめたかった。

自分自身の変化

自分の今回の体験を踏まえて、皆が政治や社会により関心を持つべきだと感じた。私は模擬国連の活動をより多くの人に知ってもらい、普及させてる事が、この目的を達成できる手段だと確信した。

印象に残っていること

女子校訪問。短い時間しかすごせなかったが、私のことを「親友」「絶対に忘れない！」と言ってくれたアイリーンという友達がいるから。

アクションプラン

自校の模擬国連の活動をより活発化し、他校との交流を実施し、日本模擬国連高校生連盟を作る。

これから

アフリカというと、民族間の対立等の恐いニュース等があり、日本人とは違った野蛮な人々かと思ったが、全くそうではなく、私達と同じで普通の生活をしており、家族と一緒に幸せに生活している。先入観なく皆と仲良くなり、多様性、移民を受け入れる考えが大事だと思った。アフリカ系の人も差別しない、少数派の人も差別しない、普段の生活でも皆を尊重し受け入れる考えが出てきた。

R.O.さん

（当時高校1年生/東京都）

ツアーに参加した理由

今回のスタディツアーに参加した理由は、先進国以外の外国に行きたいという願望、自分が日頃生活している環境がどれだけ恵まれているのかを知れるとても良い機会だと思い参加したいと思いました。

印象に残っていること

一番印象に残っている事は、Kisaruni女子校を訪問した際に関わった生徒さんたちに『自分の将来の夢、なりたい自分は何ですか？』と聞いたときに、どの生徒さんも、しっかりとした夢や目標、将来を描いていた事です。誰もが決意・覚悟を持っていた印象が強かったです。僕にはそのような強いビジョンがなかったので、彼女たちが光り輝いているように見えました。自分は彼女たちよりも、気持ち・メンタル面で非常に劣っているのを痛感し、「もっと自分も成長できる」と思いました。

自分自身の変化

参加前は、何かと自分の主張だけを発言し、他人の話を聞かない頑固者だったと思います。このツアーを通じ、他人の意見や外部の情報がどれだけ大切・重要なのかを痛感しました。また、環境に甘えてしまい、目的を持った生活が送れていない事を自覚できた機会でした。

アクションプラン

自分で出来る事は、自分の生活環境の無駄を省き、また、清潔に保つ事です。ケニアの経験から、自分の生活や環境に無駄が多すぎることに気付き、このようなアクションプランに至りました。例えば、自分の日頃使う施設・環境を清潔を保つ為に、少しでもいいので清掃・ゴミ拾いなどをして環境を整えることや、必要のない物を処分、いわば断捨離を行うことです。断捨離を行う際には、リサイクルショップなどに売却せず、支援団体を通じ、国内外の人たちの生活向上などに役立ててもらうことがいいと思います。自分自身、そして、周りの人たちもできることだと思っています。自分の生活環境を整えることによって、仕事などの作業の効率向上、また、清潔に保つことで長く快適に使うことが出来る。それにより、気分もスッキリし精神面が安定する。この好循環で、普段使う施設（会社、学校、自分の部屋等々）だけでなく、幅を広げて、通勤・通学中の道端にある、ポイ捨てされたゴミ・空き缶・ペットボトル・タバコの吸い殻などを、手で拾う・小さなコンビニ袋を使って拾う等、みんなが使う公共施設も綺麗にする。その輪が広がって良い街、良い地域、良い国を作るのではないかと思っています。まずは、年内中に、自分の部屋と学校の部室を清掃し、どんな人に見られても恥ずかしくない部屋にしたいです。

これから

今回のスタディーツアーを通して学べたことは、主に協調性、社交性、そして、具体的な目的・目標を作ることの３つだと思います。

最初の協調性は、色々な参加者。関係者と関わっていて、1人の事情でみんなが遅れることが如実に分かるシチュエーションが多かった印象がありました。日常生活に反映するならば、日頃の集団・団体行動の際には周りの人たちに迷惑をかけない、早め早めの行動をするなど、様々な心がけが必要ということにつながると思います。

2つ目の社交性。今回の場合、海外の現地の方々と話す・交流する機会が特に多かったと思います。その際、たとえ言語は通じなくとも、会話が通じるように努力することを惜しまないことが大事だと思いました。これは今まで話したことのない学校の人達と、また、初対面の人と話す上で大切なことだと思いました。

最後の具体的な目的・目標を持つことは、Kisaruni女子校を訪問した際、また、アクションプランニングの解説の際に、自分にはなかなか出来ないこととして再発見した部分です。これは、日常生活では日頃の計画や結果を出すための逆算の考えに活用できることだと思います。特に僕の場合は、計画やスケジュール通りに物事を遂行できない人なので、このことを特に意識して取り組みたいです。

U.I.さん

（当時高校2年生/大阪府）

ツアーに参加した理由

学校でカンボジアのツアーに参加したことをきっかけに開発途上国に興味を持ち、もっと知りたいと思うようになりました。アフリカと東南アジアの違いを知りたかったのと、実際にボランティアができるということに興味を惹かれ、参加を決意しました。このツアーに参加することで、世界を変えていくために具体的に何をするべきなのか、私に何ができるのかを考え発見し、次のステップに繋げていこうと考えていました。

自分自身の変化

開発途上国に関わりたいと思っていましたが、具体的に何がしたいのかが分からず迷走していました。しかしこのツアーで、私と同世代の若者たちを救いたいという、ひとつ大きな目的ができました。そして、それを解決するためにどうするべきか、具体的なアクションプランを考える時間が増えたと思います。考えるだけで終わってしまっていた自分から、行動に移すことに重点を置けるようになれたと思います。

アクションプラン

SNSや講演会などを通じて、開発途上国の問題や現状、必要な支援について伝える。週１でNOTEを書く、日ごろからSNSで発信。自分にできることを見つけるために情報収集。日ごろから関心を持つ。

印象に残っていること

このツアーに参加する大きなきっかけでもあった先生寮建設のボランティアが、1番自分を見つめ直すことができたプログラムでした。ボランティアをしている時、ずっとモヤモヤしていました。何のためにしているんだろう？と。そんな時、ぼんやりと子ども達がメンバーと楽しそうに話しているのを見て、ふと思いました。「今やってることって、あの子たちの教育に繋がってるんだ。」当たり前で、簡単なことでした。分かっていたはずなのに、分かっていなかったのかもしれません。私は、「ボランティアをすること」に気をとらわれすぎていて、本質を見失っていたんだと思います。そのボランティアは何のためにするのか、することで何に繋がるのか、そこを考えず、ただがむしゃらに「何かしなければならない」と、勝手に必死になっていただけでした。心の奥底にあったモヤモヤ感はそれだったんです。灯台下暗しでした。目的や目標がないと進まない。それはこのスタディツアーにも、これから行動するすべてのことにも繋がることです。誰を、何のために助けたいのか。それをどう行動に移していくのかを考える時間や機会は、また違うプログラム（リーダーシップワークショップ）でありました。とにかく、ケニアで経験したボランティアは、私のこれからの活動に大きなヒントを与えてくれました。行き詰った時は、この日のことを思い出して、本質を忘れないように進んでいきたいと思います。

これから

まずは、日本人に問題意識を持ってもらうことが重要だと思うので、伝えることからはじめていこうと思います。実際の体験や感じたことを様々な手段で多数の人に伝える。そうすれば、その中で何人かは興味を持ってくれると思います。加えて、ケニアでの生活を思い出し、日ごろから節水、節電、ご飯を残さない、ごみを出さないなど小さいことから気を使って行きたいです。そして世界のニュースや政治に興味を持ち情報収集もしていきます。

R.H.さん

（当時大学1年生/埼玉県）

ツアーに参加した理由

大学の講義の一環で参加しました。たくさんのスタディツアーがあった中で、自分はアフリカに行ってみたいという願望がありました。そのなかで、このスタディツアーは現地の人たちから話を聞くだけでなく、実際に体験できることが多かったため、いくつかあるアフリカのスタディツアーから選び参加しました。

印象に残っていること

一番印象に残っているものは、コミュニティ訪問です。コミュニティ訪問では生活の話を聞きました。感染症予防のために、ゴミを捨てる穴やシャワー、食器を洗って日の当たる場所で乾かすところ、トイレを技術移転によって設置していました。トイレの穴に落ちるのが怖くて、最初は慣れなかったという話があり、私にとっては落ちるという発想がなかったため、とても印象的でした。水運び体験のときは、20kgのタンクを担いで何往復もしていると知り、蛇口をひねると飲み水が出てくる日本との差を痛感することができました。また、コミュニティ内に小さな農園があり、その農園の技術は事前に訪問した大きな農園から得てきたものであって、成果をみることができました。

自分自身の変化

参加前は、私自身のなかでボランティアとは物を与えたり、代わりにやってあげることが一番と考えていました。しかし、これは支援する側と支援される側の間に依存関係が生まれてしまうことを認識できました。あくまで支援する側はサポートであり、主体は支援される側にならなければいけません。また、資源もその土地から取れるもので考えなければいけません。参加前と参加後ではボランティアの在り方が自分自身にとって一番変化しました。

アクションプラン

私があげた問題は「日本国内においての生体販売」です。犬、猫の例では、生まれてすぐに親元から引き離され、ペットショップで売られるのが主流です。ペットショップでは衝動買いを狙った商法がよく見られるため、ペットが大きくなると可愛さがなくなるという理由で捨てられるケースが多いのです。また、親元からすぐ引き離されることによって、無駄吠えや噛み癖、お漏らし、分離不安症などの症状が起き捨てられるケースもあります。そのため、まず”売れ残ったり、捨てられた犬や猫がどのような処分をされているのか”このことを啓発活動によって認知してもらい、次に犬や猫の生体の殺処分を一部地域ではなく、広い地域でゼロにすること。最終目標がアメリカのカルフォルニア州と同様にペットショップでの生体販売を禁止にすることがアクションプランです。

これから

私は人に教える立場のアルバイトをしています。参加後の気づきと同じ様に、説明を長々としてメインになってしまうのではなく、実践させることによって相手を主体にし、サポートにまわることを意識するべきと考えます。そして、最初から100%を教えるのではなく、相手の潜在能力を考慮しながら、柔軟に変えていくべきだと今回のスタディツアーに参加して日常生活とリンクさせることができました。

また、水運び体験で感じた大変さから、日本では蛇口をひねれば当たり前のように出てくる飲み水を当たり前と思わず、節水を改めて心がけようと思います。

T.M.さん

（社会人/愛知県）

ツアーに参加した理由

元々国際ボランティアに興味があり、昨年のインドツアーにも参加し良い経験ができたので、今年も行こうと決めました。また、幼少期に見たドキュメンタリー番組で、アフリカでの貧困や自分たちと全く違う生活スタイルに衝撃を受け、いつか自分の目で現場を見てみたい！何かしたい！と言う気持ちを漠然と持ち続けていたことも、今回の参加のきっかけです。

印象に残っていること

女子校訪問は色々と感じさせられるものがありました。彼女たちはパワフルで活気満ちていて、まだ若いけれど自分たちの学んでいることや、将来について熱心に私たちに伝えてくれました。与えられた環境で精一杯頑張り、寝る間も惜しみつつ、貪欲に勉強に取り組む姿勢には、見習わねばと刺激をもらいました。また、こうした背景にはWEのサポートがあるからこそで、こうした支援によって未来を創ったり、こんなにも人を輝かせることができるのだなと改めて感銘を受けました。

自分自身の変化

帰国して2週間程度ですが、心がまだケニアです(笑)　今回のツアーで視野がとても広がり、向上心がさらにアップしました。世界ともっと繋がりたい！と思いました。

アクションプラン

人々の心や体のケアをサポートし、
日本人の幸福度をあげたい！

これから

今回のツアーで経験したことのうち、年齢層や職種の違うメンバーと10日間過ごしたことは非常に良い経験になったと思います。それぞれのバックグラウンドや価値観を認め合い、発言に耳を傾けて、それを分かち合おうとするメンバーの姿勢にはとても刺激を受けました。そのように相手に興味を持ち、多様性を受け入れるコミュニケーションは、実生活でも活かしていきたいと思います。

N.K.さん

ツアーに参加した理由

会社で集めた文房具を届けるため。自分にできることを見つけるため。日本人に途上国へ目を向けてもらうために現場を見に行くため。

印象に残っていること

学校、病院、家庭訪問。全ての方々に共通の質問をしました。「今困ってることは何ですか。あるいは、将来を見据えて不安なことは何ですか。」答えは全員一致していました。「困ってることは何もない。以前と比べると良い方に大きく変化した。WEに本当に感謝している。」日本では考えられない生活や不便さがあるなかで、なぜこの答えが返ってくるのかずっと考えてました。帰国後、GDP一覧と世界幸福度ランキングを照合し、裕福な国は幸せなのか、あるいは裕福な国だからこそ幸せを感じにくくなってしまっているのか。その結果と、「人はどんなときに心が満たされるのか」の問いを考え続けています。

自分自身の変化

ケニアは貧しくない、ということが新たな発見でした。持ってる人はスマホを持っているし、着ている服もジーンズにTシャツ。そのことを知らない日本人は本当に多い。「病気大丈夫？水汚そう」など、出国前に色んなことを周囲の人に言われたけど、それらは全て思い込みや偏見なんだとケニアに来てすぐに分かった。確かに病気などのネガティブな事は事実かもしれないけど、それがケニアの全てだと思わせるような日本のメディアにも疑問を感じる。そのため、私は見て聞いて感じたことを、そのまま伝え続けることを決めた。

アクションプラン

ケニアで経験したことを日本で伝える。そして、少しずつ偏見や思い込みを取っ払っていく。

これから

私は、会社のサークルのような活動で、ボランティアをしています。「障害者であっても健常者でも、肌や目の色が違っていても、人はみんな同じ。違いなんて何もない。」という考え方を私は持っています。そして、その考え方を自分のボランティア活動を通じて周囲に伝え続けていきたいとも思っています。ケニアに行って現地を見てきたことにより、私の言葉はより説得力が増すはずです。自分にできることを、これからも前向きに実行していきます。

H.U.さん

（社会人/愛知県）

ツアーに参加した理由

以前この団体のことをラジオで聞き、インドスタディツアーに参加した。そして海外にとても興味を持った。今回ケニアスタディツアーの募集を見て、アフリカに行く機会はそんなにないだろうと思い、また日本ではできない貴重な経験がしたいと思って参加した。

印象に残っていること

今回のツアーで一番印象に残っているのは、キサルニ女子校の訪問である。学校の生徒の説明を聞きながら、校内見学をした。中でも、一方的に知識を教えたり学んだりする「教員と生徒」の関係ではなく、生徒が自分で調べて学習し、分からないところを質問する「ファシリテーターとラーナー」という関係であるとの話が特に印象に残っている。これは今、日本が進めようとしている「主体的・対話的で深い学び」を先取りして取り組んでいると感じた。日本の特に公立学校では、教師が一方的に知識を教えて生徒はそれをノートに取って記憶する授業がまだ多いように感じる。この学校では、生徒（ラーナー）主体で展開される授業が行われていると分かった。理科の実験も見学したが、全て生徒が実験の操作をしながら説明していた。また、１日のスケジュールを聞いていると、朝４時半に起きて夜遅くまで学習活動をし、自習の時間も多く取られていた。この学校は全寮制である。このように早朝から夜遅くまで学習できるのは、通学時間がかからないというのが大きいと思う。それと合わせて、生徒たちの「調べたい」「知りたい」「学びたい」という意欲の高さも感じられた。

自分自身の変化

私は視覚障害があり、全く見えない。今回のツアーに参加して、「障害者が健常者のところに出て行って一緒に活動する」ことの大切さを感じた。今回のツアーでは、日本スタッフ、現地スタッフ、参加者、とツアーに関係する全員が、私の誘導や言葉での状況説明を積極的に引き受けてくれた。また、私は宿泊施設では最初に場所の確認などのオリエンテーションをしてもらい、その後は概ね一人で行動した。迷った時など、必要な時には適宜周りの人の支援を受けながら行動していた。これを通して、周りのみんなに、私が行動する普段の様子を見てもらうことができ、よい刺激になったと思う。学校の総合的な学習の時間などの障害理解教育で、よく障害当事者を招いて１-２時間話を聞くという活動がある。もちろん、それはそれで多くの学びがある。しかし、短時間話を聞くより一定期間一緒に生活して普段の様子を見てもらう方が、より多くのことを学べると思う。これからも、機会があれば私自身このような健常者が参加する行事に積極的に参加して、一緒に活動していきたい。そして、わたしの周りの視覚障害者にも、「視覚障害があっても海外に行って健常者と一緒に活動できるツアーがある」ことを伝えていきたい。

これから

キサルニ女子校での「ファシリテーターとラーナーの関係」や自習を多く取り入れたカリキュラムなど、現地の様子を周りの人たちに伝えていきたい。日本とは違う学校の様子を知ってもらえればと思う。また、「視覚障害があっても海外に行って健常者と一緒に活動できるツアーがある」ことを周りの視覚障害者に伝えていきたい。そして、1人でも多くの視覚障害者が、このようなツアーに参加し、外に出て行く機会が増えればいいと思う。健常の参加者に取っても障害者がツアーに参加すると、その人の生活の様子を見たり支援したりすることで、障害理解に繋がると思う。お互いに取っていい経験になればいいと思う。

アクションプラン

①白い杖を持たなかったり、点字ではなく大きくした普通文字を使ったりするなど、周りから障害を認知されにくい弱視の啓発。

②「視覚障害があっても海外に行って健常者と一緒に活動できるツアーがある」ことの啓発。

S.M.さん

（社会人/埼玉県）

ツアーに参加した理由

希望のない日本国内の空気にうんざりしていた。自分の知らない海外の人々が何を感じ、考え、どのような生活をしているのかを知りたかった。日頃、アフリカからの情報を耳にすることが少なかったことや、温暖な地域の人々は陽気で明るいという話を聞いたことがあったため、日本とは文化的に遠い国と判断してアフリカ行きを決めた。日本人より遥かに貧しい彼らがどのように生活しているのかを見ることで、自分が日本で生きていく上でのヒントが得られるのではないか。またアフリカの大自然にしばらく身を置くことで、日本社会の問題点を頭ではなく体で体認することができるのではないか。そうした期待もあった。私にとっては希望を見出すための旅だった。

自分自身の変化

現時点では、まだあまり具体的な変化は見られないが、すぐに表れる表面的な変化ではなく、自分を根底から変えていくような奥底からの動きというものは、なんとなく感じている。ひとつ自覚できる変化があるとすれば、あまり先のことを心配しなくなったかも知れない。彼らは貧しく、貯金するだけの金銭的余裕がない。なので病気や高齢を理由に働けなくなったら生きていけないだろう。それが良いことだとは思わないし、不安でもあるだろうが、でも彼らはそういうものだと思って生活している。自分を含めた日本人も、貯蓄不足で将来が不安な人が多いだろうが、そういうものだと開き直って今日一日を輝かせることに焦点を当てて生活すれば、無闇に暗い気持ちにならずに済むのではないかと思う。少なくとも日本人はケニア人よりもずっと金持ちなのだから。

印象に残っていること

Kisaruni女子校への訪問。国内最高峰の教育施設ということだが、国のために希望に燃えて勉強する学生というのは素晴らしいと心から感じた。日本では絶滅危惧種だろう。全寮制で朝4:30～夜10:00まで勉強漬けの日々だが、彼女たちの目は輝いていた。また「多様性を尊重しよう」「生徒が教師から学ぶばかりでなく、教師もまた生徒から学ぶ」などの進んだ教育理念にも感激した。これが生まれた背景には民族間での長い争いの歴史があるそうだ。しかし、国内最大級という図書室の蔵書の少なさには驚いた。部屋自体も20畳もないように感じた。こんなに熱意ある生徒がたくさんいるのに、実にもったいないことだ。日本の学生のやる気のなさや、その原因でもある教養を軽視して学歴だけを重視する日本社会を思い出し、無性に悔しい気持ちになった。

これから

外国人に対する偏見が減った。もともと差別意識は持っていないつもりだったが、10日間黒人に囲まれて生活する中で、顔つきや肌の色、言語が違っていても、彼らも自分たちと全く同じ人間なんだと感じた。そう感じたということは、見下すということではないにしても、人種が違うということを理由に、自分と彼らとの間に必要以上に高い壁を築いていたということになる。ちょうど先日、郵便局前で黒人の若者に声をかけられた。不在時の荷物預かり票の扱いが分からないようだったので代筆した。筋骨隆々とした背の高い人だったので、以前ならひるんでしまっただろうが、ごく普通に接することができた。今後、どのような人種の人に対しても、同じように自然に接することができるだろうと感じている。

アクションプラン

あまり長期的なプランは作成できていないが、まずは英語を学ぶことにした。具体的には半年後の英検で準2級取得を目指す。その後は習熟具合を見てその都度目標設定をしていくが、英検準1級までは取りたいと考えている。英語を学ぼうと思った理由は、海外の人と交流する上で必須だと感じたからだ。今回のツアー中も、英語を使って自分で直接コミュニケーションが取れればどんなに良かっただろうか、と何度も思った。また海外メディアの発信する情報を得られるメリットもある。

STAFF&GUEST

Me to We Kenya
トリップファシリテーター

David Rombo
(Dayvo)

Me to We Kenya
トリップファシリテーター

Charles Murage

WE Charity
マサイ戦士

Filipe

Free the Children Japan
ファシリテーター

伊藤菜々美

ゲストスピーカー
アクセプト
・インターナショナル

山崎琢磨

ゲスト
RAHA KENYA

河野理恵

ケニアスタディツアー
宿泊や移動のあれこれ

①ナイロビからナロク群までは小型チャーター機
②ナロク群での移動車　③宿泊テント　④⑤テント内/ベッド
⑥テント前にはキャンプファイヤースペース
⑦ダイニングスペース（食事・ワークショップ・団らん）
⑧〜⑪食事 （朝はパンケーキやワッフル、パンなど。昼夜は野菜炒め、お肉、マッシュドポテトやライスなど。飲み物はチャイティーやコーヒー、お水があります。）

変えたい自分がいる　変えたい世界がある
見つけよう自分のチカラ!

体験だけでは終わらない！

＼WE オリジナルプログラム／

－中高生のためのスタディーツアー、キャンプ、語学研修－

この夏、あなたはどれから はじめる？

夏休みプログラム
募集開始
2019

FREE THE CHILDREN
「世界は変えられる」子どもがそう信じられる社会に
認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

プログラム詳細は内側をチェック！☞

支援のカタチ＆ケニアの暮らし・文化を体験！

ケニアスタディーツアー

支援地域を訪問
現地でボランティア！

割引特典あり　大自然＆サファリツアーをマサイの人々と楽しめるボランティアの旅

日程	2019/8/7-8/16（成田発着）
地域	ケニア（マサイ・マラ地区）
対象	中学生以上 ※親子での参加歓迎！中学生未満の方はご家族で参加できます。

こんな方におススメ！

- ✓ 支援のカタチを体験したい！
- ✓ 現地の子どもたちと交流したい！
- ✓ ケニアの暮らしや文化に触れたい！

スケジュール（予定）

1日目　日本発→アジスアベバ着 アジスアベバ発→ナイロビ着
2日目　ナイロビから国内線でマサイ・マラへ　支援先のコミュニティへ
3日目　スワヒリ語レッスン、支援先の村を訪問、村人の生活を学ぶ
4日目　支援する学校と病院を訪問・見学。支援先の村でボランティア
5日目　マサイママによるビーズアクセサリー教室、リーダーシップ・トレーニング
6日目　支援先の村でボランティア、マサイの人々の文化について学ぶ
7日目　マサイの人々のガイドによるサファリツアー、リーダーシップ・トレーニング
8日目　マサイ・マラからナイロビへ車で移動（6時間）途中、世界遺産に登録されている
アフリカの大地を切り裂く「グレート・リフト・バレー」を見学
9日目　ナイロビ出発アジスアベバへ
10日目　アジスアベバからソウル経由　帰国

■宿泊施設

宿泊先は、安全・安心・清潔な施設に泊まります。トイレ・シャワーも完備しており、衛生的ですので、ご安心ください。（テントには各自のベットをご用意しております。）

■食事

滞在先の宿泊施設には食堂を完備し、衛生面には細心の注意払って調理しており、栄養バランスの考えられた食事を提供します。水についても、水筒を持参いただき、プログラム中はミネラルウォーターを提供します。

POINT

支援地域訪問

事業についてのオリエンテーションを通じて支援のカタチを学び、村の環境や人々の暮らしの変化を直接見ることができます。

学びや理解を深める

学んだこと、感じたことを共有し、ディスカッションを通じてさらに深めます。そしてワークショップを通じてその先のアクションを考えます。

暮らしや文化を体験する

水汲みや民族衣装を着るなどの生活・文化体験や、学校建設などのボランティアワークも！

割引特典　早割　5月24日までのお申込で 1万円引き

参加費	453,000円
募集締切	6月27日
最小催行人数	9名

詳細・資料請求は右記QRコードからWEBサイトにアクセスください。QRコードが読み取れない場合は FTCJ で検索！

旅行企画・実施：エアワールド株式会社　お問合せ先：株式会社マイチケット（代表電話）〒660-0084　尼崎市武庫川町4-27-1 Tel.06-4869-3444/E-mail info@myticket.jp 日本旅行業協会協力会員　兵庫県知事登録旅行代理店第142号（総合旅行業務取扱管理者：山田 和生）　プログラム提供：認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

Thank you for joining.
Keep on taking action together!
We can change the world!

FREE THE CHILDREN

認定NPO法人　フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6-6-5 3F

☎: (03) 6321-8948 ✉: info@ftcj.org　WEB: http://www.ftcj.org